反転する世界

桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
反転する世界

【Ｎコード】
Ｎ９９４９Ｎ

【作者名】
桜

【あらすじ】
英雄エイトは神鳥の導きにより、自分の世界とよく似ているが、何故か自分“以外”の性別が逆になっている異世界に降り立つ。その世界では、トロデーン城がイバラの呪いに包まれた直後であった。声を失うというハンデを抱えながらも、未来を知る彼は七賢者の子孫達を救うために、再び世界を救う旅へ出る。

プロローグ　落ちる。

世界を救い、一年ほどたった頃だろうか。
城が呪われる前の生活を取り戻し、その平和な生活にすっかり慣れた僕はそれなりに充実した日々を過ごしていた。近衛兵隊長として、後輩の育成や見回りや魔物退治などの仕事をこなす日々。
そうすると、自然とゴールドが貯まってくる。使う暇がないから。
そこで、僕は

……休暇が欲しいな。

なんて思ってしまったわけだ。
さて、思い立ったが吉日。ルーラで一年前に旅した町や村　を見て回って、魔物の被害や被害状況を確認したいと王に直訴してみた。
その際には英雄という立場を最大限活用させて頂く。
すると、王はあっさり許可を出してくれた。自分から申請した癖に、こんなにあっさり許可を出してしまっていいのだろうかと不安になってしまった。

まあ、許可といっても条件はある。
期間は一週間、それと、僕の代わりを務められそうな実力を持つものを城に置くこと。
うん、一週間もあれば休……任務には十分だろう。代役は、あの旅のメンバーの誰かが妥当だろうか。ゼシカは村や港で忙しいと聞くし、ククールはふらふらしていてどこにいるかわからないし　（孤児院を経営していると噂で聞いたけど本当だろうか？）そうすると、やはりヤンガスが適任か。
早速手紙を書いて、彼が現在寝泊まりしている家屋に送る。移動呪（ルーラ）文は本当に便利だ。

数日後、返事がきた。ヤンガス付きで。
快く承諾して貰ったら、後はこっちのものだ。僕がいない間の注意事項を簡単に伝え、客室に彼の荷物を運びこむ。ヤンガスには僕の代わりの特別講師として、兵士達の指導にあたってもらうことにした。彼は自信満々に任せろと言っていたが、正直不安だ。普段剣や槍を扱う兵士達に、鎌や斧を扱う様はいい刺激になるとは思うが。

ま、深く考えないでおこう。とりあえず、今は明日からの休……
任務の準備が大事だ。
僕はるんるんとふくろに道具を詰め、武器の手入れをした。防具は魔物の個体数自体が少なくなった今、派手なものを着ると悪目立ちするので、着ていくのはたびびとの服だ。
準備を終えると後は寝るだけ。寝つきがいい僕はすぐに眠りに落ちて、朝になった。
朝食を食べると、すぐに荷物をまとめて門へと向かう。見送りはいない。
僕が出て行くことを知っているのは、王や大臣などのごく一部の人間だけだからだ。

門番に門を開いてもらい、城の外へ出る。
長い石づくりの階段を降りながら、僕はこれからどこへ向かおうか考えた。
行きたいところはたくさんある。リーザス村でゼシカの顔も見ておきたいし、ゴルドの復旧状況も自分の目で知りたい。旅の中でお世話になった人にお礼も言いたい……
久々の休暇に僕は浮かれていた。だから、足元に注意をむけなかった。

がくん、と体が傾き、奇妙な浮遊感が僕を襲った。

階段を踏み外したのか、と反射的に視線を足元に向ける。
そこには、階段はなかった。穴。底が見えない暗闇が、そこにあった。

「――！」

バランスを崩した己の体は、そのまま真っすぐに穴へと向かう。
縁を掴もうとした手はむなしく空を切り、僕は穴の中へ落ちて行った。

旅立ち　前編

穴に全身が入った瞬間、視界が黒に染まった。どこが上で、どこが下なのかさっぱり分からない。ただぐるぐると回りながら落ちていく。酒を飲み過ぎた次の日のような気分になる。要するに吐きそう、ということだ。けれど、この感覚には覚えがある。闇の世界のレティシアへ行く際に通った裂け目と、似たような感覚だ。僕がそう思った瞬間、目の前にひらひらと光が落ちてきた。よく見ると、それは淡い光を放つ羽だ。どうして羽が？　疑問に思いつつも、僕は手を伸ばしそれを掴む。

「エイトさん。聞こえますか」

頭に直接響く、涼やかで凛とした声。これは――レティス？

「貴方を巻き込むのは心苦しいですが……貴方以外に適した人はいないのです」

なんの話だろう。首を傾げる僕に構わず、彼女は続ける。

「これから貴方を異世界へ連れていきます」

……は？

「もう一度、世界を救ってください」

どういう意味だ、と問いかけようとした瞬間、地面に思いっきり腰を打ちつける。

突然のことで、受け身も満足に取れなかった。

視界は既に晴れていた。腰を庇うようにおさえながら、ゆっくりと立ち上がる。まず確認するのは背中にある武器の無事。

……うん、問題なさそうだ。じゃあ、その次に確認しなければならないのは、ここがどこか、ということ。そこでようやく僕は辺りを見回した。ここは、城のバルコニーだ。さっきまで階段にいたのに、どうして城内に逆戻りしているのだろうか。不思議に思いつつ少し視線を上げた瞬間、僕は絶句した。

頭上で渦巻く暗雲。白塗りの壁を打ち抜く、緑のイバラ。見覚えのあるそれらに背筋が凍る。あの悪夢が、よみがえる。あの日――トロデーン城がイバラの呪い包まれた日のことを。また、暗黒神がよみがえったのか？

……そうだ、陛下は？　姫様はどうした？　城は静まり返っていて、人の気配は一切感じられない。僕は即座に駆けだした。

陛下、姫様――！

城中を駆けずり回り、彼らを探す。しかし、見つかるのは既にイバラに姿を変えられた者達ばかり。それも一つ、一つ確認していくが、陛下や姫様らしき姿はない。その度に安堵する自分の不謹慎さに吐き気がした。だが、今は自己嫌悪に陥っている場合じゃない。謁見の間、姫様の部屋、図書館――二人が訪れそうな場所を全て確認したが、いない。残るは、あの杖が封印されていた部屋のみ。心の中で祈りながら、長い階段を駆け上がり、重い扉を開いた。

そこに、陛下と姫様はいた。しかし、その姿は……

「おお、エイト！　無事であったか！」

一年前の、呪いに包まれた姿。陛下は魔物に、姫様は馬に。それは悪夢が繰り返されたことを示していた。間違いない、暗黒神が復活したのだ。ああ、でも、二人が無事で良かった。陛下と姫様がいるならば、僕は何度だって戦える。安堵のため息をつき、よくぞご無事で、と声をかけ、ようとした。

「――」

ひゅう、と息がもれる。おかしいな、声が出ない。喉を押さえて、必死で声を出そうとするが、息だけで声にならない。陛下も僕の様子がおかしいことに気付き、心配そうな顔で僕を見上げる。

「もしや、エイト……声が？」

首を縦に振る。すると、陛下は顔を伏せた。

「そうか、呪いを受けたのじゃな。我が息子、ティアもそうじゃ。忌々しいあの道化のせいでかような姿に……！」

いや、僕に呪いは効かないはずだ。恐らく、声が出ないのは別の要因……

……ん？　今、陛下はなんと言った？　”我が息子、ティア”？　陛下の御子は、ミーティア姫様ただ一人のはず。僕の聞き間違いだろうか？

「おお、ティアよ！」

白馬に縋りつくようにして嘆く陛下。聞き間違いじゃない、確かにティアと呼んでいる。一体これはどういうことなんだ？　……いや、今はそれを考えている場合じゃない。前とほぼ同じ状況であるなら、ここにはすぐに魔物がやってくるだろう。早くここを離れなければ。それを伝える為に、陛下の肩に触れ此方に気付いてもらう。

「なんじゃ、エイト？」

気付いてもらった所で、僕は二人から離れて扉を開く。そして、扉の外を指さした。
言葉で伝えられないのが、ひどくもどかしい。

「外に出よう、ということか？　ふむ、いや、確かにいつまでも嘆いているわけにもいかん。それよりも、あの道化を追いかけて王子の呪いを解かせねばならぬ」

陛下は立ち上がり、白馬を気遣いながら扉の前まで進む。僕はそこで初めて、間近でその白馬を見た。どこか気品を感じる立ち振舞いは、姫が白馬だった時のものと良く似ている。しかし、どこか凛とした顔つきはまさに男特有のものだ。僕はそれで確信した。この馬は、姫ではない。

陛下と白馬を連れて、階段を下りる。ちょうど階段を降り切ったそのすぐそばに、イバラになった兵士を見つけ陛下は驚愕した。急いで駆け寄り、恐る恐るといった様子でその身体に触れる。イバラはまだ暖かく、姿を変えたもののまだ生きていることが分かったのだろう。複雑な表情で、ゆっくりと手を離した。

「まさか、この城にいる者は全て……」

その問いに頷くと、陛下はぎりり、と歯を噛みしめた。
そういえば、あの時もそうだったな。あの日、この城がイバラに包まれた時も陛下は怒り、姫はそれをいさめるように陛下に鼻をすり寄せ――

不意に、嘶きが聞こえた。見ると、それは白馬から発せられたものだった。何度も両前足を高く上げ、嘶く。その響きには確かに怒りが感じとれる。彼は、国民がこのような姿に変えられたことに怒っているのだ。王子も、国民を愛しているのだ。……それだけで、十分だ。僕が命を掛けるには。

背中から槍を抜き放ち、その辺りに転がっている瓦礫に傷をつける。いや、正確に言えば文字を刻んだのだ。下手くそな文字。それでも、声での意思疎通が出来ない今はこれに掛けるしかない。通じるかどうか不安だったが、陛下はなんとか読み取れたようだ。

”もうすぐ魔物が来ます　今は避難を”

「魔物？　魔物など何処に……」

その時、ちょうど耳触りな甲高い声が聞こえた。門の方からだ。窓からその方向を見ると、ドラゴンのような形のイバラが浮遊していた。いばらドラゴンか。
それだけではない。地獄のよろいや、ガルーダ、フラワーゾンビなどの多種多様な魔物が、門からなだれ込んできたいた。呪いの魔力と、上空の暗雲が魔物達を呼び寄せているのだろうか。いや、でも、前の時はここまで大軍で来なかったはずだが……

「むむ！？　ほんとうにきおったわ！　しかし、避難しようにも門

にあれほどいるとなると」

”私が道を開けます”

そう書いた後、ふと思い出す。確か、前はここから出る前に錬金釜を回収したっけ。あれはすごく便利だったな……今回でも、きっと役に立つだろう。そして、僕は少し文字をつけたした。

”錬金釜はどこですか？”

「なぜ今それを……ふむ、いや、あれは役立つかもしれん。取りに行こう」

そう言って、走る陛下。僕も王子を連れてその後に続く。周囲への警戒は怠らずに。

どうしてこうなってしまったのか、まだ十分に理解は出来ないが、とりあえずここから脱出するのが先決。前回だって守りきることが出来たのだ。なら、今回も必ず――――いや、何度でも守りきってみせる。

僕はぎゅ、と槍を握る手に力をこめた。

旅立ち　後編

錬金釜、魔法のカギ、筆談の為の紙、ペン、インク……その他冒険に必要なものを揃え、馬車に積み込んでいく。馬車を引くのは王子だ。彼自身がそれを望んだのだが、陛下は渋った。本当の馬のように扱うことに抵抗があるのだろう。前回の時もそうだったから、驚きはしない。ただ、納得するのが前回より早かったのは気のせいだろか。

不意に、頬を鋭い棘で覆われたイバラが掠める。いけない。考え事をしている場合じゃなかった。対峙しているイバラドラゴンを改めて見据え、ふ、と息を吐き出すと同時に、槍を軽く振るう。その一閃だけで、あっけなく相手の身体は二つに裂けた。はらはらと地面に落ちるイバラを踏みつぶし、切り返して地獄の鎧の頭部を落とす。頭部を失った鎧はぐらりとバランスを崩し、イバラの上に倒れた。着々と、僕の周りに魔物の屍骸が積み上がっていく。それを見てようやく相手との差を理解しはじめたのか、此方に向かってくる魔物の量は減っていた。

「よし用意が出来たぞ！」

振り返ると、陛下は既に御者席に座っていた。両手にはしっかり手綱を握っている。王子が事前の打ち合わせ通りに動けば、手綱は無意味なのだが。まあ、とにかく、僕が道を開けなければ何もかも無意味になってしまう。槍を掴む手に力をこめ、大きくぐるりと回す。声が出せない今、それが開始の合図。

進路の邪魔になりそうなヤツのみを切り伏せながら走る。そんな

僕の後ろから、地面に転がる屍を踏みつけ、馬車を大きく揺らしながら白馬が走る。怒涛の進行。門に辿り着く頃には、自ら僕達に近づこうとする魔物はいなくなっていた。――たった、一匹を除いて。

「なんじゃこれは！？」

なんだこれ。門の前に立つ、大きな体躯の魔物。ボストロール。いや、姿かたちはボストロールのようだが、僕が知るボストロールより遥かに大きい。そもそも、トロデーン城でボストロールが出たことなんてなかったのに。思考停止した僕の頭上に、大きな棍棒が振り下ろされる。背後から聞こえた陛下の絶叫で、ハッと我に返った。

咄嗟に、右に跳んで回避。棍棒は地面を大きく抉り、その強大な力を見せつける。だが、それに伴い生まれた隙もまた大きい。直ぐにボストロールに接近すると、でっぷりと前に突き出した腹へ向けて、五月雨突きを放つ。一つ一つの突きが持つ攻撃力は低いものの、それが4、5回当たれば通常の攻撃より高火力だ。全ての攻撃がヒットし、ボストロールはよろける……が、すぐに体勢を立て直して棍棒を振り回した。

大振りで避けやすい棍棒を軽く回避しながらも、僕は頭を働かせた。あまりここで留まっていると、折角蹴散らした魔物達がまた集まってしまう。陛下や王子に被害が及んだら大変だ。だが、ボストロールは門の前に立っている。どうにかして退かさなければ。

「うお！？」

陛下！？　背後から聞こえた小さな悲鳴に、僕の意識がそちらに行く。その瞬間、棍棒が横から襲い掛かり、僕を吹き飛ばした。勢

いよく城壁に叩きつけられ、全身に痛みが走る。体力の半分がごっそり持っていかれた感じだ。回復しようと口を開いたが、すぐに閉じた。声が出ない今、呪文を紡ぐことは不可能だ。バックから手探りで万能薬を探し、口に運ぶ。苦味がじわりと広がるが、それに構っている暇はない。早く向こうに行って、陛下と王子を助けなければ。

傷が塞がるのも待たずに立ちあがる――と、足元で聞きなれた小さな鳴き声が聞こえた。視線を落とすとそこにいたのは茶色の小さなネズミ。トーポ！という歓喜の声はただの息として吐き出される。けれど、長い付き合いである僕らの間に言葉は必要ない。そっと手を差し出すと、トーポは何のためらいもなく駆け上がり、定位置であるポケットの中へ身を滑り込ませた。それを確認してから僕は陛下達の元へ走り出す。

随分遠くまで飛ばされてしまったみたいだ。やっとボストロールの所まで辿りついたと思ったら、今まさに棍棒を馬車へ振り下ろさんとするところだった。僕は慌てて、腰に下げておいた炎のブーメランを手に取り、思いっきり投げつけた。ブーメランはくるくる回りつつ、ボストロールの瞼を切り裂く。傷は意外と深かったようで、おびただしい量の血液が流れた。その血で視界が悪くなったボストロールは目標を見失い、棍棒は見当はずれの場所に振り下ろされる。

「エイト！」

陛下の嬉しそうな声が耳に届く。けれど、安心するにはまだ早い。あのボストロールは門の前から一歩も動かないのだ。しかし、あの巨体＋棍棒のリーチで攻撃範囲は広い。少しでも動いてくれれば、あの門を開き陛下と王子を外へ逃がすことが出来るのだが……そう思っていると、ポケットがもぞもぞと動く。視線を落とすと、トー

ポがポケットから顔を覗かせていた。危ないから、と伸ばした手をすり抜けて、トーポは地面に降りる。そして、ボストロールの元へと駆けていった。

危ない！　と、叫ぶものの、声にはならず。トーポは素早くボストロールに近づくと、その太い足から一気に頭部まで駆け上がっていった。そして、ボストロールの体中を走り回る。

「グオオオオオ！！」

くすぐったいのか、気持ちが悪いのか、ボストロールはトーポを振り払おうと暴れまわる。ついにはその棍棒すら投げ捨てて、トーポを捕まえようと必死だった。しかし、トーポは相手の太い指と指の間を簡単にすり抜け、中々捕まらない。ボストロールは一歩、また一歩と門から離れていく。トーポを捕まえるのに必死で気付いていないようだ。……今だ！

僕は門に駆け寄って鍵を外し、開いた。大きく開かれた先には長い階段があるが、幸い魔物の姿はない。槍を大きく振って此方にくるように指示すると、賢い王子はすぐさまこちらに駆けつけてくれた。そして、階段を器用に、けれど素早く下りていく。その後ろ姿を見送って、改めてボストロールの方を見るとまだトーポ相手に格闘しているようだった。これはチャンスだ。ボストロールを放置したら、城どころか他の町や村にまで影響を及ぼしかねない。大技で一気に沈めよう。

目を閉じ、精神を集中させる。外部の音は全て遮断され、暗い闇の中で一人でいる感覚に包まれる。聞こえるのは、ドクン、ドクン、と規則正しく動く心臓の音のみ。その闇の中で、不意に光が走る。

――――今だ。

カッと目を開き、その光に向けて槍を突き立てる。その瞬間、地面に魔法陣が展開され、眩く発光しつつ僕の周りを回った。僕の足元は黒く塗りつぶされ、そこから紫を帯びた雷光がボストロールに向けて走る――！！

「グアアアアア！」

雷がボストロールに到達する瞬間、トーポは軽やかに地面に着地した。幾筋もの雷がボストロールの巨体を這い、貫く。その凄まじい威力に耐えきれず、ボストロールは二、三度大きく痙攣した後、轟音と共に地面に倒れ伏した。……終わったのだ。ふう、とため息をつきながら、槍を背中に戻す。足元にはいつの間にかトーポがちょこんと座っており、つぶらな瞳でこちらを見上げている。相変わらず、可愛いやつだ。

トーポを拾い上げ、門の外へ出る。これ以上トロデーン城に魔物が入っても困るので、門はしっかり閉めておくことにした。門に背を向けて、とん、とん、と軽い歩調で階段を下りていく。しかし、またここを旅立つことになるとは思わなかったな。レティスが言っていたように、ここは異世界なのか？　けれど、ここには陛下がいる。トロデーン城もある。それに、もう一度、世界を救うって一体……未解決の謎がぐるぐると頭の中を回る。

「エイト！　無事だったか！」

階段を下りきると、陛下が駆け寄ってきた。とりあえず、その問

いに対して頷いておく。陛下は安心したようだ。しかし、城の方から魔物の吠え声が聞こえると、顔を強張らせた。……陛下の精神の為にも、早くここを離れた方が良いな。僕は再び槍を手に持ち、地面に文字を刻む。

“行きましょう”

「う……うむ、そうじゃな。早くあのにっくき道化師を捕まえなければ！」

陛下は御者席に座り、僕は王子の傍に立つ。王子がゆっくりと歩を進めると、それに合わせて馬車の車輪もゆっくりと回り、前へ進む。……陛下が無言だ。心配になって振り返ってみると、陛下は城に目を向けていた。

「待っておれ。必ず……必ず戻ってくる……！」

ヒヒン、と王子もそれに同調するように嘶いた。僕も頷いた。そうだ。何度だって、必ず――

暗い影を落とす城を背にして、僕の――僕達の旅は、始まった。

山賊少女

見上げれば、快晴の空。ガラガラと車輪の音のみが響く。そう、車輪の音。それだけだ。会話はない。白馬になった王子も、声を失った僕も話すことが出来ないから。陛下も黙り込んで、ただ道の先を見据えている。……こういう時、ヤンガスが居ればな。彼は気がきくし、陛下とも仲が良い。そういえば、彼もトロデーン城にいたはずなのに、さっき城を走り回った時に姿を見つけることが出来なかった。イバラにされた者にもそれらしき姿はなかったし、あんな状況の城から逃げ出すようなやつではない。……ということは、やっぱりこのトロデーン城は――レティスの言う通り異世界なのだろうか。そんな考えが浮かぶが、いまいち確信が持てない。

あれこれと考えている内に、つり橋に差し掛かった。そういえば、ヤンガスとはここで出会ったんだっけ。ひどく懐かしい。そう、ちょうど橋の真ん中辺りに彼が立っていて。あんなふうに斧を片手に――

「止まれッ！」

そうそう。止まれって言われ……　え？

「アンタ達、誰の許しを得てこの橋を渡ってんだい？　あ゛？」

聞いたことがある台詞が耳に入り、慌てて視線をそちらに向ける。そこにいたのは、女の子だった。頭から首にかけて巻かれているターバンによって、顔はよく見えない。ターバンの合間で彼女の目がぎょろりと動く。目つきがかなり悪い。ザ・悪人顔、といった風だ。

小柄で身長が僕の腰ほどまでしかないことが、威圧感をかなり和らげているが。

「許しもなにもあるか！　ここはまだ我がトロデーン国の領地じゃ！」

陛下は普段通り、一切臆することなく相手の言葉を切り捨てる。しかし、姿が異形である今ではその言葉に説得力はない。普通の人ならば呆れるか、戯言だと笑うだろう。目の前の彼女は、後者だった。

「あはははは！　おいおい、おばさん！　その顔で女王様気取りかい？　くっ……あはははは！」

「笑うでない！　くっ……デリケートな所を無遠慮に突きよって。お前こそ何者じゃっ！」

どこかで聞いたような会話を続ける、陛下と女の子。いや、それより気になるのは、今、彼女は陛下のことを”おばさん”って言わなかったか？　けれど、陛下はそれを否定しない。気付いていないだけか、それとももしかして、本当に”おばさん”なのか？　姫が王子になったように、陛下も女王陛下に？

「……アタシかい？　ふっ、いいよ。耳の穴かっぽじってよぉく聞きな！」

混乱する僕を余所に、会話は続く。そして、次の台詞で僕は驚いた。

「豪腕の女山賊、ヤンガス！　この辺りでも少しは知れ渡ってるだろ？」

ヤンガス！？　僕は初めて声が出なかったことに感謝した。もし声が出ていたら、僕は絶叫していただろう。というか、ヤンガス？この女の子が？言われてみれば、目つきの悪さが似ている気がするが……

「な、なに！？　ヤンガス……じゃと……？」

「ふっ。観念したなら、大人しく通行料を置いていきな」

ブン、と斧を振り回しニヤリと笑うヤンガス。その瞬間、陛下は噴き出した。

「はははははっ！　愚か者め。そんな名前聞いたこともないわ！散々カッコつけよって、阿呆め！」

腹を抱えて、仕返しとばかりに大爆笑する陛下。それを見て、ヤンガスの頬がひくりと動く。僕は驚いた。陛下がヤンガスを知らないなんて。本当に知らないのか？　これじゃあ、まるであの旅が始まる頃に戻ったみたいだ……いや、まさかそうなのか！？

「ぐぐぐぐ……クソッ、人が大人しくしてりゃあ、調子に乗りやがって！」

彼女は顔は真っ赤にして、わなわなと身体を震わせた。しかし、それでも陛下の笑いが止まる様子はない。その辺りにしときましょうよ、と陛下をいさめる前に、ヤンガスはブチ切れた。

「そういうことなら、このアタシの実力をその目に刻みつけてやろうじゃないかッ！！」

ヤンガスは強く踏み込んでから、大きく跳躍した。そして、力を溜めるように斧を振り上げ、落下と同時に振り下ろす！　しかし、幾多もの戦いを切り抜けてきた僕からすれば、それは止まっているのにも等しい攻撃だ。軽くバックステップでかわすと、斧はそのまま、つり橋に突き刺さった。

つり橋は、木の板とロープで出来た簡素なものである。そこに、斧を突きたてればどうなるか。ヤンガスは木の板に刺さった斧を抜こうと必死だ。その動作により、裂け目は広がっていき、そして――乾いた音と共に数枚の板が川へと落ちた。

「うわっ！？」

ヤンガスは小さな悲鳴と共に、僕の視界から消える。視線を落とすと、小さな手が板にしがみついていた。ホッとするのと同時に、ミシミシ、と嫌な音が耳に入る。僕は頭から血の気がさっと引いていくのを感じた。もしも、今の状況があの時と同じなら――この橋は、落ちる。

「エイト、今じゃ！　一気に橋を渡ってしまうぞ！」

陛下の声でハッと我に返り、僕は駆けだした。小さな手を踏まないように注意しながら。僕と王子は軽やかに穴を飛び越え、なんとか橋を渡りきることが出来た。だけど、まだ安心はできない。あのヤンガスと名乗る女の子が助かっていないのだ。僕は振り返って、橋を見る。彼女はまだ板にしがみついていた。

「う……くっ」

苦しそうな声。それと同時に、ロープはプツンと切れる。彼女の

悲鳴と共につり橋は崩壊し、川底へと消えていった。彼女は！？
川底を覗きこむと、彼女の姿があった。つり橋が崩壊する中、なんとかロープの端に掴まることが出来たらしい。運動能力が凄いのか、悪運が強いのか。ほっと安堵しながら、僕はロープを引っ張り上げる。彼女が小柄で軽いおかげで、引っ張り上げる作業は楽だった。

「な、何をしとるんじゃ！？　あやつめはわしらを襲った相手じゃぞ！」

いつの間にか隣に立っていた陛下がそう言うが、まさか本当に放っておくわけにはいかない。

「このまま気付かなかった振りで通過しても、きっと神様もお許しになるじゃろうて！」

いや、駄目でしょう……という冷静な突っ込みを心の中でしておく。
引っ張り上げていたロープはするすると上にあがって、ヤンガスは直ぐに地面に辿りつくことが出来た。

「た……助かった……絶対死んだと思った……」

心臓の辺りを抑えながら、荒い呼吸を整えるヤンガス。そこに、陛下が呆れたような顔で近づいた。その顔からは、どうして助けたんだ、という不満がありありと窺える。

「ヤンガスとか言ったな？　エイトの慈悲を有り難く受け入れ、さっさとワシらの前から失せよ」
「はぁ……はぁ……じょーだんじゃない！」
「む？　まだ怖い思いが足りんのか。かくなる上はワシが……」

その瞬間、ヤンガスはガバっと跳ね起き、そして僕に向き直った。体勢は完全に土下座だ。

「エイトさん……いえ、エイトの兄貴！　アタシは兄貴の寛大な心に心底感動しました！」

目がキラキラと輝いている。男のヤンガスが僕を見るのと同じ目だ。純粋過ぎる尊敬の目。僕は、彼女がこの後に続ける言葉が分かったような気がした。脳裏に野太い男の声が再生される――これから兄貴と呼ばせてくだせぇ！

「今日から兄貴と呼ばせてください！」

ああ、やっぱり。彼女はヤンガスなんだ。と、僕は妙に納得してしまった。

「こ、これ、待たんか！エイトはわしの家臣じゃぞ！　子分になりたいなら、頼む相手が違うじゃろうが！」

「うるせえよ！　ババアには頼んでねぇ。アタシは、エイトの兄貴の子分になるんだ！」

「バ……ババアはとはなんじゃ！　一国の女王を捕まえてなんという言い草！」

「おい、まだ女王なんて言ってんのか！？　アタシは真面目な話をしてんだよ！」

「まだ疑っておるのか！　この……」

目の前で繰り広げられる低レベルな口喧嘩を眺めながら、僕は考えこんだ。王子と姫。陛下と女王陛下。女のヤンガスと、男のヤンガス。これによって導き出される結論。それは、ここでは僕以外の

性別が反転しているということ。つまり、やっぱりここは異世界なのだ。あまり認めたくなかったのだが。

そして、再び呪われた城、王子、陛下。女のヤンガスが、男のヤンガスと全く同じ登場、展開をしている点。それは示すのは、あの旅と全く同じことがこの世界で始まるということ。そして、レティスが言った「もう一度世界を救ってほしい」という言葉。これは、つまり僕にまたあの旅を繰り返して、暗黒神を倒せということかなのだろうか。

……別に構いやしない。守る相手が女王陛下でも王子でも、性別は違うけれど、中身は同じなのだ。ならば、彼らの為に尽力するのは苦ではない。ただ、少し疑問は残るが――――前と同じならば、その内にレティスと会えるだろう。その時に聞けば良い話だ。

考えがまとまった所で、僕は立ち上がって馬車へと向かった。ごちゃごちゃと様々な物が山積みになる中から、紙とペンとインクを取り出し、さらさらと紙にペンを走らせた。書き終えると、未だに低レベルな喧嘩を止めようとしない二人の間に立ち、紙を突きつける。

”戦力が増えるのは有り難いです。彼女の申し出を受けましょう”

「む……だが、こやつは……」

渋る陛下。しかし、この返答は予想済みだ。もう一枚の紙を見せる。

”これからは長く険しい旅になるでしょう。僕一人で王子と陛下を守りきれるかどうか、わかりません”

陛下はうぐ、と言葉に詰まった。とりあえず子供の名前を出して

おけば、説得は大体成功する。それはこちらの陛下も同様だったらしい。しかし、いざという時、人数がいた方がいいのは確かだ。それに、前の旅でもヤンガスは頼りになったし、今回でもきっと頑張ってくれるだろう。ただ、女の子にタフさや攻撃力を求めるのは間違っている気がするが。

「う、うむ……仕方あるまい。ヤンガス、お前を家臣として認めよう」

「アタシはアンタの家臣になるつもりはないって言ってるだろ！」

再び火花を散らし始めた二人の間に割って入り、僕は紙を出した。

”とりあえず、トラペッタへ向かいましょう。詳しい事情は、この先にある空き地で話すね”

「あ、兄貴がそう言うなら……」

「そうじゃな。では、再出発といくか！」

陛下はひらりと御者席に座り、それと同時に王子はゆっくりと歩きだした。

トラペッタ　前編

街道から外れた森の中に存在する、休憩所。普段はトロデーン国とトラペッタを行き交いする商人が利用しているのであろうそこで、僕らは切り株に座り休息を取っていた。ヤンガスに状況を説明するという名目だが、実はまだ旅慣れていない王子と陛下を休ませる為でもある。陛下にそれを伝えたら、きっと道化師を追うことを優先せい！と怒られるので言わなかったが。

ヤンガスへの説明はほとんど陛下が行い、必要な時は僕が補足した。陛下の手を煩わせたくはないが、書くより言う方が遥かに効率が良いのだから仕方ない。ただ、度々入るヤンガスの茶々に、一々反応する陛下を宥めるため、結構時間がかかった。頭上にあった日が大分傾いている。

「兄貴がまさかそんな呪いを受けていたなんて……ドルマドン、絶対許さねぇ！」
”ドルマゲス、ね”

拳を握り気合い十分で叫ぶ彼女に悪いと思いつつも、間違えている言葉を訂正する。すると彼女は気分を害した様子もなく、おお、そうでしたね！と、素直に頷いた。その挙動の一つ一つが少し子供っぽくて、可愛らしい。妹が出来た気分だ。いや、妹分、という意味でそれは合っているのかもしれないが。

「しっかし、何度も言うようだけど、兄貴がこの変なおばさんの家来なんてねぇ」

そう言いつつ、視線を傍らに座る陛下に向ける。その視線を受け、陛下は立ち上がりヤンガスを真っ直ぐに睨み返した。ああ、また口喧嘩が始まりそうだ。

「好きに言うがいい。下賤の者にこのわしの気品など分からんじゃろうからな！」

「気品？　どこにそんなものがあるんだい？」

「何ぃ！？」

バチバチと二人の間に火花が散る。先ほどからずっとこの調子だ。前の旅ではここまで喧嘩が続いてはいなかったと思うのだが……やはり、女性だと色々変わることもあるのだろうか。あれこれと考え込んでいると、不意に陛下が顔を上げて辺りを見回した。

「そんなことより、王子はどうした？　姿が見えぬが……」

その言葉にハッとして辺りを見回すが、直ぐに心配ないことを思い出して、僕は胸を撫で下ろした。確か前の時は、ちょっとこの場から離れていただけだったはず。あれ、でもこの後何かあったような……？　と、思った瞬間に、背後の草が揺れる。僕はそちらに向き直り槍を握った。何か、来る。

「ぴきー！　ぴきー！」

そこから現れたのは、三匹のスライム。気が抜けて思わず槍を落としそうになり、慌てて握り直す。さっきボストロールと戦ったせいか、スライム相手だとどうも気合いが入らない。いくらなんでも落差がありすぎる。しかし放っておく訳にもいかない。なので槍を構えようとすると、ヤンガスがそれを片手で制した。

「アタシに任せてください！」

僕の前に立ち、ニッと微笑むその顔からは自信が窺える。その表情から察するに、兄貴に良い所を見てもらおう！という感じだろうか。まあ、相手はスライム三匹だし、問題はないだろう。頭を縦に振って了解の意を伝えると、彼女は背中から棍棒を抜き取って、地面を蹴り魔物の群れへ突っ込んでいった。

群れに突っ込んできた彼女を見て、スライム達は一斉に襲い掛かる。しかし彼女はそれに怯むことなく、棍棒で迎え撃った。繰り出される一撃は、その小柄な体躯からは想像もつかない程重い。スライム達は抵抗する間もなくあっさりと潰され、地面に屍を晒し……戦闘は終わった。

「薬草一個か……しけてんなぁ」

そう文句を言いながらも、屍から薬草と隠し持っていた金貨を拾い上げてバックに仕舞う。その動作はかなり手慣れているものだった。呆けたように彼女を見ていると、僕の視線に気づいたのか此方に駆け寄ってくる。そして、胸を張って、自信に満ちた表情で僕を見上げた。

「どうでした？　アタシ、やるでしょう」

その言葉に、僕は笑顔を浮かべ頷いた。予想以上の強さだ。確か前の時は、僕も男のヤンガスも戦闘経験が少なく、スライム程度の相手にも命がけで挑まなければならなかった。しかし、彼女は３匹をあっさり一撃で仕留めた。……トロデーン城にいたボストロールといい、この世界と僕の世界ではどうやら性別の他にも違う点があるようだ。

「ほのぼのしとる場合ではないぞ！　王子は、ティア王子は無事か！？」

陛下の声に顔を上げ、辺りを見回す。すると、王子は街道へと続く入口から堂々と入ってきた。きっとお花畑で花でも摘んでいたのだろう。陛下はその姿を見るなりすぐさま王子に駆け寄り、安堵したように息を吐く。過保護で心配性な所は相変わらずだ。そういう、僕の世界と同じ点を見るたびに少し安心する。

「さて、馬の王子様もおもどりだし……そろそろ出ないと、日が暮れちまいますよ」

ヤンガスの言葉に、僕は空を見上げた。先ほどまで真っ青だったはずの空が、今は全体に赤みがかかっている。これが黒に染まると、魔物が活発化し、面倒なことになる。陛下と王子の安全を確実に確保できるよう、早めにトラペッタに着いた方が良い。その皆を陛下に伝え用意を整えると、僕達は街道に出た。

がらがら、と馬車の車輪が回る音に、ヤンガスと陛下が口喧嘩をする声。ヤンガス一人が入るだけで、ここまで賑やかになるのか。改めてその有難みを感じ、心の中で感謝する。ヤンガスという話相手が出来たことで、一時的にではあるが陛下は城のことを考えずに済んでいるようだった。その会話の内容が口喧嘩であっても、城のことを思い出し憂鬱になるよりは遥かにマシだ。時折耳に入る漫才のような掛けあいに笑いながらも、僕達は街道を歩いていき――つ

いに、その姿が見えた。

トラペッタ。この大陸で最大の規模を誇る都市だ。また、かつてのトロデーンとサザンビークの戦争時代の名残を最も強く残している都市でもある。外敵に寄せ付けない堅牢な塀と、例え襲撃されたとしても侵攻を遅らせる、複雑な街並み。しかし、平和な現代ではそれらが活用される場面はない。恐らく、これからもない……と、信じたい。某国の某王子が王位につけば、どうなるか分からないが。

故郷に残してきた頭痛の種を思い出し憂鬱になる。と、ふと視界の端に黒いものが見えた。それに目を凝らして見てみると、どうやらそれは煙のようだった。ドス黒い煙が高く上り、赤い空に吸い込まれるように消えていく。その様子はひどく不気味だ。更に、町が近づくにつれて何かが焼けるような臭いが漂ってき、気分が悪くなる。

「焼き肉パーティでもしておるのかのう。……ううむ、腹が減ってきたぞ」

そう言って腹を撫でながら、ため息をつく陛下。後で何か食料を買っておかなければならないな。確か、食料品店は北部にあったかな。そんなことを考えている内に、僕達はトラペッタの門に辿りついた。決められた回数に従って門を叩くと、それに応えるように門は開いていく。

僕とヤンガスが先行し、その後に続いて馬車を引く王子と、陛下が入る。門番と軽く挨拶を交わしながら門をくぐれば、そこはトラペッタの町だ。道端で露天を開く行商人に、その商品を一つ一つ吟味していく旅人。賑やかなその様子に、一番興味津々だったのは王子だった。きょろきょろとせわしなくその大きな眼を動かしている。

城からほとんど出ることが出来ない王族にとって、こういう光景は珍しいのだろう。

わき見ばかりで横に逸れそうになる彼を引きもどしつつ、歩み続ける。もうすぐ広場だ。ひとまずそこに馬車をとめて……そう考えていた時、視界の端に黒い塊が見えた。それと同時に、何かが焼けているような臭いが一層強くなる。思わず歩く速度を緩め、僕はその黒い塊をまじまじと見た。それは、炭化した家の残骸だった。まだ残骸の奥の方では火があるようで、もくもくと煙が立ち上っている。確か、これは……マスター・ライラスの家？　そういえば前の時も家が燃やされていて、彼はもう亡くなっていたんだっけ。そう、ドルマゲスの手によって。七賢者の子孫の血により、暗黒神を復活させる為――

僕はそこではたと気が付いた。もしも、今回もドルマゲスが同じ目的で人を殺めるのならば、殺害を事前に阻止することが出来るんじゃないか？　ゼシカの兄、オディロ院長、ギャリング、チェルス、メディおばさん、法皇……僕の目の前で亡くなった人も、僕が町に着いた時には亡くなってた人も。間に合うかもしれない。

そうか、これがレティスが言っていた、”救う”の意味なのか。今の僕ならば、ドルマゲスを倒すことは不可能じゃない。それに、これは未来を知る僕にしか行えないこと。

「どうしたんですか、兄貴？」

ヤンガスに声を掛けられ、ハッと我に返る。どうやら考え事をしている間に、足が止まっていたらしい。ひまとまず、今は目の前のことに集中しなければ。なんでもない、と首を横に振って再び僕は歩き始めた。

――広場に着く頃には、日は地平線へと入りかけていた。陛下からマスターライラスを探すようにとの命令を受け、ヤンガスと共に情報収集へ向かう。もちろん僕はマスターライラスが既に死んでいることを知っているが、余計なことを言って陛下に不安を与えるのは避けたい。僕が異世界から来たことは、時期を見て話そうと思う。

「兄貴、まずはどこから回りましょうか？」

傍らに立つヤンガスが、此方を見上げて尋ねる。こうして見ると、普通の女の子のようだ。この小柄な体のどこに、スライムを一撃で潰す力があるのだろうか。いや、まあ、女性だからと言って必ずしも非力ではないというのは分かっている。具体的に言えば、ゼシカの双竜打ちとか。

「兄貴？」

中々返答をしない僕を不思議そうに見る彼女。ああ、いや……と言いかけて、声が出ないことを思い出した。咄嗟に言葉を話せないのは、非常に面倒だ。えっと、確かどこから回るか、だったっけ？

情報収集の基本を考えると、多くの人が集まる酒場に行くべきなのだが、今の時間ではまだ人は少ない。行くのは完全に日が落ちてからの方が良いだろう。それまで、軽くその辺りを散策するか。ひとまず階段の方を指さすと、彼女は頷いた。

階段を上がり、トラペッタ北部の住宅街の入口に立つ。さて、どこから見て回ろうかと思った時、真っ先に目に入ったのは武器屋の看板だった。うん、情報収集のついでに、ヤンガスの武器でも見ていこうか。目標を定め歩き始めると、僕のすぐ後ろを彼女がついてくる気配がした。

「っらしゃい！　何かお探しで？」

店主が、その自慢の胸板を張りながら声を掛ける。生憎、僕は声が出ないので、情報収集の方は彼女に任せ、店内をぐるりと見回す。見るのはカウンターに並べられている商品ではなく、壁に飾られた武器だ。恐らくは店主が趣味で集めているのだろう。そのほとんどは模造品だったが、いくつかは本物が混じっていた。その中から、ヤンガスが使える武器を探す。幸い、金はあるのだ。急ぐ旅路でもあるし、高額であっても良い装備を早めに整えておきたい。

そして様々な武器を吟味している内に、一つの斧が目に入った。確かこれは、山賊のオノ、だったか。見た目はシンプルだが、余計な装飾がない分攻撃力は十分ある。柄が長く刃も大きいため、小柄なヤンガスでも振り回し易そうだ。

「にいちゃん、そのオノが気になるのかい？」

振り返ると、店主とヤンガスがこちらを見ていた。情報収集はひと段落ついたのだろうか。とりあえず、店主の問いに頷いてみせると、彼が覆面の奥でニヤリと笑った気配がした。

「ふむ、でもそれはこの辺りでは手に入り辛い品だからなぁ。値段をつけるなら、３９０００Ｇだな」

「さ、さんまん、きゅうせん、ごーるど……」

ヤンガスが絶句している。……通常の価格の三倍か。まあ、この辺りでは手に入りにくい品だから、妥当な値段だろう。それに、その価格に見合った性能でもあるし。確か、バックには３０ゴールドはあったはず。我ながら頑張ったなあと城での激務を思い返しなが

ら、カウンターにその金額を置いた。

「ありがとう。さて、誰が装備するんだい？」

彼女に、とヤンガスを指さす。

「あ、アタシに！？」

僕は首を傾げる。彼女以外に誰がこのオノを装備するというのだろう。僕はオノを扱えないし、そもそも英雄の槍の方が性能良いし。彼女はカウンターの上のオノと、僕とを交互に見ている。そして、小声で「こんなに高いものを……」と呟いた。遠慮しなくても、と思いつつ、カウンターのオノを手に取る。それを差し出して、僕は装備をするように促した。彼女はそれを少し躊躇った後、受け取る。

「わあ……」

軽く振るい、使い心地を確かめる。その目はキラキラと輝いていた。柄を撫でてみたり、刃を様々な角度から眺めてみたり、もうその新しい武器に夢中になっているようだった。ここまで喜んで貰えるだけで、３９０００００Ｇの価値はあった気がする。そう思いつつ、その様子をほのぼのと眺めていると、彼女はハッと我に返り、背中にオノを背負った。

「あ、ありがとうございます、兄貴！」

深く頭を下げるヤンガス。顔を上げさせて、僕は気にしなくて良いと首を横に振った。ヤンガスを引き連れ、武器屋を出る。背後から店主の声が聞こえ、遅れて扉が閉じた。外はもう大分暗くなっており、酒場のざわめきがここまで聞こえる。そろそろ酒場に行って

も良いか。時折嬉しそうに背中のオノを撫でるヤンガスと共に、僕は酒場へ向かった。

トラペッタ　前編（後書き）

ヤンガスのイメージは、少年ヤンガスをそのまま性転換させた感じです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9949n/

反転する世界

2011年12月11日18時45分発行